

東京の米騒動

——民衆生活の重層と都市——

中筋 直哉

東京の米騒動は、東京市と隣接する郡部で1918年8月12日から17日までの6日間に起こった。これまでこの事件は、名前が示すとおり、主食の窮乏を打開するための民衆の闘争と評価されてきた。だがあらためて史料を見直すと、この評価に見合う行動は少なく、むしろ全く異なる論理に基づく行動がより多く見出せる。わたしは、そうした行動の分析を通じて、当時の東京の民衆生活を明らかにしよう。

史料に見出せる行動は、近隣の米小売商への廉売強要、繁華街の小売商のショウ・ウィンドウへの投石、米価に関わる公共機関の建物のファサードへの投石の三つである。まずそれらが、市の周辺部の細民街に住む雑業者、市の中心部の街区で住みこみで働く店員や職工、市の中心部の街区で通いで働く店員や職工の生活にそれぞれ基づくことが分析できる。またそれらが、家の近隣でみずから見聞きすることで成り立つ情報世界、繁華街で周囲の風景に見入ることで成り立つ情報世界、新聞を読むことで成り立つ情報世界にそれぞれ基づくことが分析できる。東京の米騒動は、こうした民衆の生活と情報世界の空間的・時間的な重層、つまり大正の東京という都市を明らかに映し出す都市民衆騒擾だったのである。

1. はじめに——問題の所在——

東京の米騒動は大正7年(1918年)の8月12日に日比谷公園(千代田区日比谷公園:括弧のなかは現在の住所表示)ではじまった。それから17日までの6日間、市中の各所にひとが集まって騒擾を繰り返してひろげた。

米騒動とは大正7年7月下旬から9月中旬までの約2か月間、全国368市町村に起こった民衆騒擾事件の総称である。これまでこの事件は、名前が示すとおり、主食の窮乏を打開するための民衆の闘争と評価されてきた(江口[1989:55])。たしかに全国では米の廉売を求める行動が多く見られた。ところが東京ではそれとは異なる行動がより多く見られた。いったい東京の民衆は何を求めて行動したのだろうか。こう問うとき、事件は当時の東京の民衆生活を明らかにする手がかりとして新たな重要性を帯

びてくる。この論文は、東京の米騒動の分析を通じて、当時の東京の民衆生活を明らかにするものである。

2. 行動のかたち

騒擾の主体の論理を分析するために、まずこれらの行動をそのかたちに注目して見出そう⁽⁰¹⁾。東京の米騒動の史料には少なくとも三種類のかたちの行動を見出せる⁽⁰²⁾。

第一の行動は、近隣の米小売商に押し掛けて店舗の破壊と蔵米の投棄を条件に米の廉売を強要することだ。これを米の廉売強要と呼ぼう。

〔補:14日〕午後九時すぎ、(補:浅草公園や吉原遊廓から出た)約千名の群衆は浅草区浅草町三九(台東区清川二丁目)白米商飯田万助方に押寄せ、(中略)『暴徒ハ熾ニ擲石シテ硝

子戸ヲ打壊シテ焼イテ仕舞ト叫ビ」、人夫富永鉄次郎（四十四）（補：浅草町在住）は、『同家雇人海佐原徳太郎ニ対シ内地米一升二十銭デ売レ、然ラザレバ焼イテ仕舞ウゾ』とおどして、『即時右価額ニテ内地白米二石四斗ヲ売却セシメ』た（予審終結決定書）。」（補は論者の補足）
（井上・渡部編 [1960：299]）

この行動は、全国ではもっとも多く見出せる、いわば米騒動のモデルである（井上・渡部編 [1959:106]）。ところが東京では浅草区（台東区東部）や本所区（墨田区南部）など市の周辺部の区と、南千住町（荒川区東部）や吾嬬町（墨田区北部）など隣接する町で、騒擾が拡大した13日の翌日の14日以降に少数だけしか見出せない。東京の米騒動では、これは周位的で限定的な行動なのだ。

第二の行動は、繁華街の小売商のショウ・ウィンドウへ無差別に投石することだ。これをショウ・ウィンドウへの投石と呼ぼう。

「（補：13日午後9時ごろ）『群衆は、銀座にいで』尾張町（中央区銀座五丁目）辺で急激に群衆の数をまし、『矢庭に尾張町的人力車製造業秋葉大助商店』（東京朝日、八・一四）の『陳列窓を破壊し、小野楽器店・三枝雑貨店・松本織物店・大和シャツ店・十字屋書店等に瓦礫を投じて陳列窓を破壊し、就中大和シャツ店は厚硝子窓の被害二〇円以上に及び、十字屋も五〇〇円に及』んだ。」

（井上・渡部編 [1960：290]）

この行動は、全国では名古屋・神戸などの大都市だけで見出せる。とりわけ東京では銀座や上野など市の中心部の繁華街で、騒擾が拡大した13日から騒擾が終熄に向かった16日まで

に、頻繁に見出せる。東京の米騒動では、これは中心的で一般的な行動なのだ。

第三の行動は、米相場に関わる公共機関の建物のファサードへ投石することだ。これをファサードへの投石と呼ぼう。

「（補：13日）九時半頃鎧橋（中央区日本橋兜町）突破したこの一隊は、『蛸殻町（中央区日本橋蛸殻町一丁目）の（補：米穀）取引所に殺到したるが、逸早くも急報に接せる久松署警官非番全部約三〇〇名を間隔なきまでに配置して、くいとめたるため、忽ち撃退されて、（中略）三〇分ほど小競合を演じてのち、群衆は茅場町（中央区日本橋茅場町一丁目）に引返し、今度は霊岸島方面（補：深川正米市場の方向）へ隊を組んで進み、（東京日日、八・一四）』
（井上・渡部編 [1960：291]）

この行動は、全国では対象になる公共機関のある一部の大都市だけで見出せる。とりわけ東京では市の中心部にある農商務省や米穀取引所や二ヶ所の正米市場に向けて、13日に騒擾が拡大すると同時に見出せ、さらに16日までに何度も見出せる。もっともこれらの建物は警察や軍に護衛されているので、行動は短い時間しか持続しない。東京の米騒動では、これは中心的だが限定的な行動なのだ。

三種類の行動は、空間の次元では東京市と隣接する郡という範囲に中心部からファサードへの投石、ショウ・ウィンドウへの投石、米の廉売強要の順に展開し、時間の次元では4日間という範囲に13日からファサードへの投石、ショウ・ウィンドウへの投石、米の廉売強要の順に継起した。東京の米騒動とは三種類の行動のこうした集合のことである。それでは三種類の行動の主体の論理はどのようなことなのだろう

か。

3. 主体の論理

【米の廉売強要】

この行動は近世江戸の「打ち毀し」で押買と呼ばれた行動と同じかたちをもつ。歴史家はその主体の論理を次のように推定している。まず廉売の強要という行動は、対面取引（直段相対）という小売一般の慣行に裏づけられている（岩田 [1990: 82]）。取引が成立すれば、民衆は相場に見合う価格でなく自分の生活に見合う価格で米を得られる。次に店舗の破壊と蔵米の投棄という暴力は、米小売商の営業能力を失わせる効果をもつ（岩田 [1990: 85]）。また近隣という場所は、民衆の生活の基盤であるとともに米小売商の営業の基盤である。そこで両者とりわけ民衆は特定の売買関係を持続させる必要がある（岩田 [1990: 90]）。行動は強奪ではなく取引でなければならない。つまり押買は、米小売を相場に連動する状態から特定の売買関係に基づく状態へ切り替える試みなのだ。

それではこの行動は押買の再現なのだろうか。たしかに主体の論理は同じように推定できる。だが米の流通機構が変化したために、その効果が失われてしまった。鉄道輸送の発達に伴い、米小売商は在庫なしに営業できるようになった⁽⁰³⁾。蔵米の投棄は小売商の売り惜しみを妨げられなくなったのだ。また民衆も小売商ともに参入・退出が激しくなって、特定の売買関係を持続させることが難しくなった⁽⁰⁴⁾。廉売強要は強奪と変わらなくなったのだ。つまりこの行動は主体の論理と行動の効果が乖離したままに実行されたのである。

この行動の主体は次のような性格をもつ。まず何よりも米つまり主食の窮乏に苦しんでいることだ。次に流通機構の変化にもかかわらず、

特定の売買関係に固執することだ。さらに騒擾が拡大した日の翌日にならないと行動を実行しないことだ。

【ショウ・ウィンドウへの投石】

まず投石という行動は、ショウ・ウィンドウという販売装置の作用に敏感に反応している。ショウ・ウィンドウの作用とは、ガラスを隔てて見入らせることで商品への羨望を喚起することだ⁽⁰⁵⁾。石は装置が誘導する視線つまりガラスを貫いて商品へと注がれる羨望の陰画なのだ。次にガラスの破碎という暴力は、この装置の作用を一瞬にして停止させる効果をもつ。また繁華街という場所で、小売商と民衆は互いに不特定多数として売買関係を結ぶ。逆にいうと特定の売買関係を持続させる必要がない。羨望は店ごとに喚起されるので、その陰画である投石も店を選ばない。つまりこの行動はショウ・ウィンドウという販売装置の作用を商品の種類を問わずに停止させて、それが喚起する羨望の累積を解消する試みなのだ。

この行動の主体は次のような性格をもつ。まず主食の窮乏よりも繁華街で売られる商品つまり奢侈品全般への羨望の累積に苦しんでいることだ。次にショウ・ウィンドウの性能に敏感に反応することだ。さらに騒擾が拡大した直後から終熄に向かうまでつねに行動を実行することだ。

【ファサードへの投石】

まず投石という行動は、第二の行動のそれと同じだ。だがショウ・ウィンドウとちがって、建物のファサードは公共機関の活動に直接関わる性能を持たない。石はただそれらへの抗議を象徴的に表現するだけだ。また米相場に関わる公共機関は、米小売商と民衆の売買関係をその外側から規定する制度の装置である。ところが民衆はその活動に関わる正規の手段、たとえば

相場に参入するための資本や政治に参加するための選挙権を何も持たない。つまり第三の行動は、米相場に関わる公共機関の活動を異常と判断して、それらの活動に関われないままに抗議する試みなのだ。

この行動の主体は次のような性格をもつ。まず米でなく米価を問題にしたことが示すように、主食の窮乏でなく食費の膨張に苦しんでいることだ。次に公共機関の活動の正常異常を自分の生活に結びつけて判断できることだ。さらに騒擾が拡大すると同時に行動を実行することだ。

それではそれぞれの主体の性格は実際にはどのように形成されたのだろうか。

4. 主体の性格

【危機感覚】

米の廉売強要は市の周辺部の街区で実行された。そこは明治中期以降に市の中心部の貧民街から流出したひとと関東近県の農村から流入したひとを滞留させて成立した細民街である（紀田 [1990:104]）。そこで民衆は力役や行商などの雑業で稼いだわずかな収入をもっぱら食べものに費やす生活を営んでいた⁽⁹⁸⁾。とりわけ主食へのこだわりは稼ぐ力の源であるだけに強かった⁽⁹⁹⁾。そのうえいったん家庭を築けば、家族の食べものにも収入を費やさなければならなくなる。米の小売価格の騰貴はかれらのこうした生活を成り立たなくしてしまう。こうした生活が主食の窮乏に苦しんでいるという主体の性格を形成したのである。

ショウ・ウィンドウへの投石は市の中心部の繁華街で実行された。そこはもともと裕福な新中間層の市民を顧客にする商店街である（安藤 [1931→1977: 22]）。だが望み通りに商品を得られるかれらは事件に参加しない。参加するのは

望むばかりで商品を得られないひとだ。市の中心部の、繁華街をとりまく街区には中小商店や町工場が集積しており（森 [1981: 36]）、そこでは20歳前後の店員や職工が多く働いていた⁽⁹⁸⁾。なかでもより若いひととは職場の世帯に住みこんで働いていた（那須 [1969:289]）（森 [1981:52]）。かれらは食生活が保証されている代わりに自由に使える賃金は限られていた（那須 [1969:293]）。それでも世界大戦のもたらした好況で賃金は急速に上昇した。奢侈品に羨望する余裕ができたのだ。ところが大戦末期には物価の上昇が賃金の上昇を上回ってしまった（江口 [1989: 38]）。かれらには余裕があり、ショウ・ウィンドウには商品があふれているのに、そのどれを買うこともできない。こうした生活が奢侈品全般への羨望の累積に苦しんでいるという主体の性格を形成したのである。

ファサードへの投石も市の中心部で実行された。20歳前後の店員や職工は、住みこみのうちは自分の生活を営む苦勞を免れていた。奢侈品に羨望する余裕もあったのだ。ところがいったん独立して通いになり、そのうえ結婚して家庭を築けば⁽⁹⁹⁾、かれらは自分だけでなく家族の生活をも営まなければならなくなる。一方世界大戦中の小売米価の低迷は（井上・渡部編 [1959:4]）、かれらの生活を収入をもっぱら食べものに費やす段階から離脱させつつあった。収入のより多くの部分を食べもの以外に費やしたい。この意欲を大戦末期の物価の上昇はかつての生活に引き戻すように阻んだ（中川 [1985:101]）。食べられないほどではないが、収入を食べもの以外に費やせないほどに米価が高い。こうした生活が食費の膨張に苦しんでいるという主体の性格を形成したのである。

【情報世界】

米の廉売強要は特定の売買関係に固執するこ

とではじめて実行された。つまり主体はこれまでそうした固執を裏づけるような情報に接してきた一方で、それを裏ぎるような情報に接することを免れてきたのだ。明治中期以降、市の周辺部の細民街は収入の乏しい雑業者でも生活できる街区として発展してきた。逆にいうと、そこに参入する米小売商はみな雑業者の収入に見合う低廉な営業に甘んじなければならなかった。雑業者と米小売商とのこの均衡は互いに売買関係に固執するかぎり持続するものだ⁽¹⁰⁾。一方細民街の雑業者のリテラシイは、明治後期以降義務教育が急速に普及したにもかかわらず、まだ低い水準にあった。とりわけ事件当時30歳以上のひとのリテラシイは、義務教育が導入される前に学齢期を過ごしたうえに職場で読み書きを必要としなかったもので、より低い水準に留まった。かれらは米価の騰貴の原因を解説する新聞記事を読むことができない⁽¹¹⁾。かれらはそれを米小売商との売買関係を通じて識る他はなかった。こうした情報世界が特定の売買関係に固執するという主体の性格を形成したのである。

ショウ・ウィンドウへの投石はその性能に敏感に反応してはじめて実行された。つまり主体は日頃より繁華街を往き来する生活を営んでいて、そこに張り巡らされたショウ・ウィンドウの作用を受け続けていたのだ。20歳前後の店員や職員の職場は市の中心部の商店や町工場だった。住みこみならなおさらそうだ。さらに繁華街の商店で働くひとが多かった。一歩職場を出るとそこは繁華街なのだ。また電話が導入されるまでは、商店や町工場は若い店員や職工を同業者や得意先との連絡業務に充てた。かれらは徒歩か路面電車で繁華街を往き来して、路上や電車の窓からショウ・ウィンドウに見入った⁽¹²⁾。そのときかれらのふところにはわずかば

かりの賃金がしのばせてあったにちがいない⁽¹³⁾。こうした情報世界がショウ・ウィンドウの性能に敏感に反応するという主体の性格を形成したのである。

ファサードへの投石は公共機関の活動の正常異常を判断してはじめて実行された。つまり主体は日頃より公共機関の活動を知らせる情報を得ていて、その正常異常を自分の生活に結びつけて判断していたのだ。事件の起こるかなり前から、新聞は米価の騰貴を解説する記事を掲載し続けていた。記事の多くは第一に民衆の生活難を描写し、第二にその原因を米相場の騰貴に特定し、第三に問屋商の過剰投機と政府の無策を糾弾し、最後に相場の制御と内閣の交代を提案する⁽¹⁴⁾。こうした記事が民衆の生活上の危機感覚を政治経済の体制に関連づけたのだ。一方20歳前後の店員や職工のリテラシイは、義務教育が導入された後に学齢期を過ごしたうえに職場で読み書きを必要としたので、新聞記事を読める水準に達していた⁽¹⁵⁾。もっとも字面を追ってもその意味を理解できるとは限らない。米相場の仕組みを理解するには相当の思考力が必要だから、記事の内容を十分に理解するひとは多くなかったはずだ。だがこの乖離は新聞側と読者側の両方の短絡によってある程度は克服された。奸商鈴木商店というように、問屋商の投機は商人個人の倫理として理解される。寺内ビリケン内閣というように、政策の失敗は政治家個人の無能として理解される⁽¹⁶⁾。とりわけかれらにまで販路を広げつつあった新聞は、読者とのこうした共犯関係を導きがちだった(山本 [1982: 97])。こうした情報世界が公共機関の活動の正常異常を判断できるという主体の性格を形成したのである。

【行動の実行】

米の廉売強要は騒擾が拡大した日の翌日にな

らないと実行されなかった。新聞はすでに8月5日から全国各地での騒擾の続発を報じていた⁽¹⁷⁾。記事の内容は廉売強要だった。だが細民街の雑業者はそれらに連動しなかった。リテラシイを持たないかれらはそれらの記事を読まなかったのだ。13日には銀座や日本橋などの繁華街で騒擾が起こった。だがこのときも雑業者はそれらに連動しなかった。かれらは力役や行商という職業がら市内を巡ることが多かったから、それらの繁華街で騒擾に遇ったかも知れない(那須 [1969:337])。だがそこはかれらの街区ではなかった。ショウ・ウィンドウや建物のファサードへ投石しても、米の窮乏は解消できないのだ。雑業者がこの行動を実行するのは、騒擾が細民街に近い繁華街である上野や浅草で起こった14日以降のことだ。そこで騒擾に遇えば、かれらはすぐに自分たちの街へ戻って行動を実行することができた。こうした状況が騒擾が拡大した日の翌日にならないと行動を実行しないという主体の性格を形成したのである。

ショウ・ウィンドウへの投石は騒擾が拡大した直後から終熄に向かうまでつねに実行された。もっとも8月5日以来の新聞報道にもかわらず、この行動はファサードへの投石が騒擾を拡大させるまで実行されなかった。逆に15日以降騒擾に関する新聞報道が禁止されたのに、この行動は16日まで実行され続けた。これらの事実はこの行動が必ずしも新聞記事を契機にしていなかったことを示す。20歳前後の店員や職工は職業がら日頃より徒歩か路面電車で繁華街を往き来していた。路上や電車の窓から、かれらはショウ・ウィンドウに見入ると同じように騒擾に見入ったのだ。とりわけ夕方以降の街路や電車の車内には、使いの帰りを急ぐ店員や終業後を繁華街で過ごす職工が多く滞留していたから、この行動の規模は急速に膨張

したはずだ⁽¹⁸⁾。こうした状況が事件が拡大した直後から終熄するまで頻繁に行動を実行するという主体の性格を形成したのである。

ファサードへの投石は騒擾が拡大すると同時に実行された。8月5日以来の新聞報道に加えて、10日には「米価暴騰問題」に関する集会を13日夕方に日比谷公園で開くという広告が新聞に載った⁽¹⁹⁾。この集会は警察に禁止されたが、その知らせは新聞に載らなかった。20歳前後の店員や職工は職場や家庭で日頃より新聞を読んでいた。果して13日夕方の日比谷公園には1千人余りのひとが集まった⁽²⁰⁾(井上・渡部編 [1960:289])。かれらは警察の介入を機に日比谷公園を出て、新聞の解説に従って農商務省や米穀取引所に向かって進みはじめた。かれらは群れをなして市の中心部の繁華街を進み、そこに滞留していたひとびとに騒擾が拡大したことを知らせた。そこではこの行動の規模が急速に膨張するだけでなく、ショウ・ウィンドウへの投石も次々と引き起されたはずだ。こうした契機が騒擾が拡大すると同時に行動を実行するという主体の性格を形成したのである。

【まとめ】

以上の分析の結果、東京の米騒動の三種類の行動をそれぞれ当時の東京の民衆生活から説明することができる。以下にまとめよう。

米の廉売強要は市の周辺部の細民街に住む雑業者の生活に基づいて実行された。かれらはわずかな収入をもっぱら食べものに費やす生活を営んでいた。かれらにとって米価の騰貴は主食の窮乏を意味した。リテラシイを持たないかれらは新聞よりその原因を教えられていなかった。近隣の米小売商との特定の売買関係に固執することで打開しようとした。米の廉売を強要したのだ。またかれらは新聞より全国の騒擾

の続発を知らされていなかったので、騒擾がかれらの街の近くの繁華街で起こるまで行動を実行しなかったのである。

ショウ・ウィンドウへの投石は市の中心部で働く住みこみの店員や職工の生活に基づいて実行された。かれらは食生活を保証されたうえに、少ないながらも賃金を得る生活を営んでいた。かれらにとって問題は米価の騰貴ではなく物価全般の騰貴だった。日頃よりショウ・ウィンドウに馴らされたかれらにとって、物価全般の騰貴は奢侈品全般への羨望の累積を意味した。かれらはそれを喚起する装置を停止することで解消しようとした。ショウ・ウィンドウに無差別に投石したのだ。またかれらは日頃より市の中心部の繁華街を往き来していたので、そこで騒擾が起こったときに直ちに行動を実行したのである。

ファサードへの投石は市の中心部で働く通いの店員や職工の生活に基づいて実行された。かれらは収入を食べもの以外にも多く費やす生活を営みはじめていた。かれらにとって米価の騰貴は家計の緊張を意味した。かれらはそれを新聞記事に従って米相場に関わる公共機関に抗議することで打開しようとした。建物のファサードへ投石したのだ。かれらは新聞より全国の騒擾の続発や日比谷公園での集会の開催を知らされていたので、騒擾が拡大すると同時に行動を実行したのである。

東京の米騒動とは、これら三種類の民衆生活に基づく行動の空間的・時間的な集合のことだったのである。

5. むすびに一民衆生活の重層と都市—

むすびに、これまでの分析の結果より大正の東京という都市の特徴を見出そう。

第一の特徴は、三種類の行動が市と隣接する

郡部という範囲に展開したことが示すように、三種類の民衆生活の共在にある。まず雑業者が市の周辺部の細民街で生活を営んでいた。明治の東京は、三大貧民窟に代表されるように、まだ市の中心部に細民街を残していた。それが市の周辺部に追い出されて、その後を中小商店や町工場が襲ったのだ。次に店員や職工が市の中心部の中小商店や町工場で働きながら生活を営んでいた。だが関東大震災の後の昭和の東京になると、かれらは郊外や臨海部に追い出されて、そのあとを新中間層が襲うことになる。また店員や職工のより若い層が、住みこみとして市の中心部なかでも繁華街で働きながら生活を営んでいた。だがかれらも、住みこみの少年労働がすたれていくに伴い、市の中心部から姿を消していく。つまり東京の米騒動は、三種類の行動を空間の次元に展開させることで、消長の異なる三種類の民衆生活の重層的共在という、大正の東京の特徴を映し出したのである。

第二の特徴は、三種類の行動が4日間という範囲に継起したことが示すように、三種類の民衆の情報世界のメディアを介した共在にある。

まずみずから見聞きすることで生活に関わる情報を得られる近隣という場所があった。次に市の中心部の繁華街が、ショウ・ウィンドウを張り巡らせることで、そこに展示される商品の情報を民衆の情報世界に広めていた。また繁華街は、街路と路面電車線を交錯させてひとを集めることで、そこで起こる事件の情報を民衆の情報世界に広めてもいた。さらに新聞が、全国規模の記事配信網を整備することで、全国で起こる事件の情報を民衆の情報世界に集めていた。つまり東京の米騒動は、三種類の行動を時間の次元に継起させることで、新聞と繁華街を介した民衆の情報世界の重層的共在という、大正の東京の特徴を映し出したのである。

とりわけ注目すべきなのは市の中心部の繁華街である。そこは民衆の生活が重層する場所であるとともに、かれらの情報世界が重層する場所でもあった。路面電車が往き来し、ショウ・ウィンドウが張り巡らされ、多くのひとが滞留する繁華街。そこで民衆はそれぞれの生活に応じて東京の米騒動という事件を体験した。とりわけそこで働きながら生活を営む若い店員や職工は誰よりも直接にこの事件を体験した。だからこそ、そこでのかれらの行動は東京の米騒動の一般的な部分を占めたのだ。

東京の米騒動—それは当時の民衆の生活と情報世界の重層、つまり大正の東京という都市を明らかに映し出す都市民衆騒擾だったのである。

註

(01)ここで論者が主体の論理として見出すのは、民衆の心性のうち、騒擾のような行動に表されることではじめて貫徹されるものである。歴史家のように言説の内容からでなく、行動のかたちから主体の論理を分析する理由は、第一にこうした理論上の要請にあるのだが、方法論上も二つの利点がある。一つは史料の蒐集に関する利点だ。一般に民衆騒擾事件の史料には行動のかたちの記録が多く、言説の内容の記録は少ない。行動のかたちに注目する方がより多くの史料を蒐集できるのだ。もう一つは史料の解釈に関する利点だ。民衆騒擾事件の記録は同じかたちの行動の集合である。それから主体の論理を分析すれば、結果に自動的に集合性を繰りこめるのだ。一方、数少ない言説から主体の論理を分析すれば、結果から稀少性をとり除く別の解釈が必要になる。

(02)史料には、井上清・渡部徹編『米騒動の研究 第3巻』の「17 東京府（渡部徹・吉田樹美子執筆）」（井上・渡部編 [1960:286-307]）を用いた。

これは事件当時の新聞記事と事件後の裁判関係の文書から事件を再構成したものだ。そのうち論者が行動のかたちを見出すのは8月13日から16日の4日間の記述である。12日や17日にもひとびとが市中の各所に集まったが、それ以上の行動をしなかったので、行動のかたちとしては見出さなかった。ただしそれらは行動の萌芽・残滓ともいべき性質を備えているので、後であらためて触れることにしたい。

(03)当時大都市での米の流通は大きな転換期を迎えていた。第一の転換は正米市場の衰退である。水上輸送から鉄道輸送への流通手段の転換にともなって、小売商は米を卸売商を仲立ちにして産地から直接仕入れるようになった（持田 [1970: 92]）。第二に産地倉庫の発達である。小売商は米を需要に応じて産地から直接送らせるようになった（持田 [1970: 96]）。この転換の結果、正米市場の倉庫にも米小売商の蔵にも市民の需要に応じるだけの米は保管されなくなったのである。

(04)東京市の史料を見出せなかったので大阪市の史料を見ると、世界大戦のはじまった大正3年に2747軒あった白米小売商が大正7年には約15%増加して3148軒になっている。ところが大正11年には2338軒と大正3年の数を下回るまでに減少している（谷口 [1931:658]）。総数でもこうだから、実際の参入・退出はより激しかったにちがいない。

(05)繁華街の小売商がショウ・ウィンドウを導入したのは、東京では市区改正事業による大通りの拡幅に伴うことだった。それまで黒塗りの土蔵造りの建物が並んでいた町並みは拡幅分だけ後退させられると同時に、ショウ・ウィンドウを備えた擬洋風の建物が並ぶ町並みに変えられていった。大正の初年代には銀座や上野などの主要な繁華街にそうした町並みが見られるようになっていた（初田 [1981: 232]）。

(06)「労働者階級の景気が好いと言った処でそれは独身者だけで三人以上の家族を有する貧民生活の状態は悲惨を極めてゐる。世人の想像するが如き残飯にも外米にも殆ど彼らの収入では満足に飢を満たすことは出来得ない。浅草町にある十銭食堂へ親子揃って晩飯を食ひにいくと其日の収入はこれで叩いて了ふ此等の人々は其日々々の収入は其悉くを食費に投じ辛うじて生活を続けてゐる。」

(「二六新報」7月25日：渡部・藤野編 [1985:7])

(07)「偕此男に私は南京米を勧めました、最初は此男も進んで妻と共に三度々々南京米を食べて居たが、或時、此男私の許に來り、南京米の不経済なる事を説く、二六時中働く者には南京米は幾ら食ても食ても、お腹が空いて堪まりません、何しても内国米が腹の持ちが宜く、却て、経済です。」

(「都新聞」8月15日：渡部・藤野編 [1985:10])

(08)1920年の第1回国勢調査の統計で街区の特徴を比較すると文末表1のようになる。

(09)同じく第1回国勢調査での男性の有配偶率(離死別含む)は、

20歳未満：0.6%

25歳未満：11.2%

30歳未満：53.2%

である。

(東京市役所編 [1923:134ほか])

(10)「ところで工場労働者とスラムにおける消費財との物価体系がことなる場合については未だ検討を加えるに至っていないが昭和三〇年春、若葉三丁目(元鮫ヶ橋：新宿区若葉)で聴取りをしていた際、古老は明治以来いちじるしく物価が低廉だったことを強調していた。」(津田 [1972:142-143])

(11)リテラシイと世代の関係を簡単に示すと文末表2のようになる。

学校に比較的多く通った子供の割合を示す通学率(日々出席生徒平均数/学齢児童総数)は、1913年(事件当時15歳のひとが10歳)で8

9.6%、1903年で69.7%、1893年で35.0%である(国立教育研究所 [1974:223,1008])。この数字からも世代によってリテラシイに大きな開きがあったことが推定できる。もっとも通学率は男性の方が女性より高いので、男性の数字はこれよりは高かったはずだ。山本武利は当時の社会調査から都市の日雇労働者のうち新聞を読むひとは1割前後だったと推測している(山本 [1981:222])。

(12)路面電車という旅客輸送装置の性能は多量のひとを運ぶことだけにあるのではない。それは大きなガラス窓を備えて(「金魚鉢」と仇名される車種もあった)、徒歩よりは早く、だがけっして急がずに街路の中央を往き來する。いわばもうひとつのショウ・ウィンドウなのだ。

(13)「それから二三日した日暮れだった。京橋のSまで仙吉は使いに出された。出がけに彼は番頭から電車の往復代だけをもって出た。外濠の電車を鍛冶橋(中央区八重洲二丁目)でおりると、彼はわざとすし屋の前を通って行った。(中略)彼は前から往復の電車賃をもらおうと片道を買って帰りは歩いて來る事をよくした。今も残った四銭がふところの裏隠しでカチャカチャと鳴っている。「四銭あれば一つは食えるが、一つくださいとも言われないし」彼はそうあきらめながら前を通り過ぎた。」(志賀 [1919→1967:9])

(14)「在米調査の結果を見ても、米は決して不足しては居らぬ。全く農家の売惜しみ奸商の買煽りの為に今日の騰貴を招いたのは明かな事実である。各地の米穀取引所は単に奸商の買煽りの為の機関であって、其立会は唯有害無益たるに過ぎない。目下焦眉の急に應ずるの手段としては此等の取引所を悉く閉鎖して、米価を制限するの他に途はないのである。政府が今日に及んで尚之を決するの意なしと伝えらるるは、何たる因循姑息であるか。」

(「萬朝報」8月12日：原典)

- (15)大正8年に実施されたいわゆる「月島調査」によると、月島と神田の小学校高学年の生徒に家での新聞購読の有無を尋ねたら、月島の労働者家庭は79.4%、神田の家庭は85.8%の家庭が新聞を購読していると答えた（内務省衛生局[1921→1970:157]）。山本武利がいうように（山本[1982:227]）この割合はやや高すぎるように見えるが、少なくとも通いの店員や職工のなかに新聞を毎日のように読むひとがかなり増えていたことは確かである。山本は別の調査の結果から新聞読者である率を45%と推定している。もっとも同じ店員や職工でもより若い世代の新聞読者である率は意外に高くない（山本[1982:236]）。かれらの方が通学率は高かったはずだが、山本が推測するようにおそらく新聞に接する余裕がなかったのだろう。この事実は、店員や職工のうちより若いひとによって実行された第二の行動が、新聞のもたらす情報を必要としなかったことを裏づける。
- (16)「米價騰貴の根元は寺内内閣の作り上げた罪悪である。斯かる國民の意志に反したる内閣は一日も速かに打破するのが刻下の緊急事であります。畏れ多きことながら、今上陛下に於かせられましては國民が米價騰貴の爲め塗炭の苦しみをなし居るを甚だ宸襟を悩まされたとのことであります。諸君斯の如き、聖上陛下の叡慮を煩わしたる奸商人は名古屋市にも澤山あることを斷言致します。宜しく諸君此の非國民の奸商人を膺懲せられよ。」（8月12日に名古屋市で警察に記録された演説のひとつ：吉河[1939→1974:285]）
- (17)7月下旬に富山県の一地方で起こった、自県米の他県移出に反対する漁家の主婦たちの請願行動は米の廉売強要に転じて、2週間後には警察の武力介入を被るまでに発展した。このときはじめて地元の新聞は全国に事件を報道しはじめた。地元紙の配信を受けて、全国紙も8月5日夕刊より事件を報道しはじめた（井上・渡部編[1959:75]）。

それから内務省が事件の報道を禁止する15日の朝まで（吉河[1939→1974:349]）、新聞は各地の騷擾を報道し続けた。

- (18)明治末期より急速に導入されてきた路面電車は、大正8年には1日の利用者が平均10万人を超えるまでになっていた。路線も市の中心の大通りを埋め尽くすとともに周辺へと延長されて総延長は138キロを数えるようになっていた（東京都交通局[1991:60-61]）。当時の絵はがきや写真は、繁華街に数珠つなぎになり、それぞれ一杯に客を詰めこんだ電車のようなすを今に伝えている（東京都交通局[1991:56-57]）。また繁華街の交差点には複数の路線が交差するところが多かった。交差する順番を待つ電車の列。乗換の電車を待つ客の列。交差点に滞留するひとはいや増した。
- (19)「米価暴騰問題に付市民諸氏に御相談仕度候間有志家及生活難の御方々は来る十三日午後六時雨天順延日比谷公園音楽堂前に御來會被下度候也發起人 宮武外骨」
（東京朝日新聞8月10日：宮武[1918→1992:374]）
- (20)すでに12日夕方にも国民大会の開催を知って日比谷公園にひとが集まったという記事が見出せる（井上・渡部編[1960:286]）。厳密にはこれが東京の米騒動の発端なのだが、かれらは何人かが煽動的な演説を試みたものの、警察に従ってほどなく解散してしまった。それで行動のかたちとして見出さなかったのだ。もっともここまでの考察から省みれば、かれらの行動は第三の行動の萌芽ともいべきものである。新聞の内容を誤解して集まり、行動を実行しようとしたからだ。ちなみに17日に上野や銀座で見られた群衆が第二の行動の残滓だったことはすでに第二の行動の考察から明らかだろう。

表1

	神田区 商業区 (千代田区北部)	京橋区 商工区 (中央区北部)	浅草区 工業区・細民街 (台東区東部)	全市
人口：	151,990	143,397	256,410	2,173,200
世帯数：	28,971	29,760	58,730	456,816
男女比：	1.36	1.25	1.10	1.16
男性のうち (%)				
15歳未満：	25.8	26.1	29.2	28.3
16～25歳：	34.4	30.5	23.7	27.7
26～35歳：	17.3	17.8	18.5	17.8
6人以上の世帯 (%)				
に属する男性：	61.9	56.4	47.9	51.7
11人以上の世帯 (%)				
に属する男性：	17.0	15.1	9.4	11.3
有職男性のうち (%)				
商業従事者：	41.7	36.0	33.5	33.3
工業従事者：	39.5	45.9	51.0	43.9

(東京市役所編 [1923:404ほか])

表2

10代：1900年以降生：六年制小学校卒（年限延長）、高等小学校卒も増加
 20代：1890年以降生：四年制小学校卒（第三次小学校令）、高等小学校卒は少ない
 30代：1880年以降生：義務教育のなかった世代（第二次小学校令以前）
 40代：1870年以降生：寺小屋世代

文献

- 安藤更生 1931 『銀座細見』→1977 中公文庫版，中央公論社。
 江口圭一 1989 『大系日本の歴史14 二つの大戦』，小学館。
 初田亨 1981 『都市の明治 路上からの建築史』，筑摩書房。
 井上清・渡部徹編 1959 『米騒動の研究 第1巻』，有斐閣。
 井上清・渡部徹編 1960 『米騒動の研究 第3巻』，有斐閣。
 岩田浩太郎 1990 「打ちこわしと民衆世界」，高橋康夫・吉田伸之編 『日本都市史入門Ⅱ 町』，東京大学出版会。
 紀田順一郎 1990 『東京の下層社会』，新潮社。
 国立教育研究所 1974 『日本近代教育百年史4 学校教育2』，国立教育研究所。
 萬朝報 1918 原典，東京大学社会情報研究所所蔵。

- 宮武外骨 1918 「米価暴騰問題の大会事件」, 『スコブル』23 →吉野孝雄編 1992 『新編 予は危険人物なり』, ちくま文庫.
- 持田恵三 1970 『米穀市場の展開過程』, 東京大学出版会.
- 森清 1981 『町工場 もうひとつの近代』朝日選書版, 朝日新聞社.
- 中川清 1985 『日本の都市下層』, 勁草書房.
- 内務省衛生局 1921 『東京市京橋区月島に於ける實地調査報告第一輯』, 内務省 →関谷耕一解説 1970 『生活古典叢書6 月島調査』, 光生館.
- 那須良郎 1969 「独占資本の進展と国民生活」, 森末義彰・寶月圭吾・小西四郎編 『体系日本史叢書17 生活史Ⅲ』, 山川出版社.
- 志賀直哉 1919 「小僧の神様」, →1967 『小僧の神様 他十篇』(岩波文庫), 岩波書店.
- 谷口吉彦 1931 『商業組織の特殊研究』, 日本評論社.
- 東京市役所編 1923 『東京市市勢統計原表 比例篇』, 東京市役所.
- 東京都交通局編 1991 『わが街 わが都電』, 東京都交通局.
- 津田真澄 1972 『日本の都市下層社会』, ミネルヴァ書房.
- 渡部徹・藤野豊編 1985 『近代部落史資料集成 第7巻 米騒動と部落問題Ⅰ』, 三一書房.
- 山本武利 1981 『近代日本の新聞読者層』, 法政大学出版局.
- 吉河光貞 1939 『所謂米騒動事件の研究』思想研究資料特輯第51号, 司法省→ 社会問題資料研究会編
1974 社会問題資料叢書第1輯第28回配本, 東洋文化社.

(なかすじ なおや)